

# おおさかを掘るー最新発掘調査の成果 北摂弥生集落の絵画土器ー茨木市中河原遺跡

20190217 茨木市教育委員会 高村勇士

## 1 はじめに

茨木市教育委員会の高村勇士でございます。拙いお話ですが、よろしくお願いたします。

### ○茨木市中河原遺跡の位置

大阪府の北部、旧国の摂津の中で北に位置している茨木市は、南北にやや長い市域を有しております。北部は北摂山地、南部は北摂山地から流れる茨木川や安威川などの河川が流れる平野です。また、南西部には千里丘陵が張り出しております。

中河原遺跡は、市域ほぼ中央部に位置し、千里丘陵の北東裾より茨木川に下る地形上に位置しており、2016～2017年度の調査区においても南西から北東に下る旧地形を確認しております。位置としては、名神高速道路の茨木インターより国道171号線を数百メートル北に向かったところ一帯に広がる遺跡です。

### ○絵画土器の出土

2016～2017年度の調査で、弥生時代の絵画土器が出土しました。それが、2018年3月24日の朝刊で新聞各紙に取り上げていただいたので、ご存じの方もいるかもしれません。レジュメにあげている写真のものです。今回は、この絵画土器を中心にお話をしていきたいと思ひます。

#### ・共通のモチーフと物語

不勉強な私のこの絵画土器を見ての最初の印象は、恐らく専門家ではない皆様とあまり変わらないと思ひます。「落書きじゃないの？」です。私には、奈良時代の落書きや習書の木簡をこれまでに見た経験があったからかもしれません。メディアや本でラスコーやアルタミラを見たことがあるからかもしれません。それでも、決してうまい絵だとは言えないよなあと思ひながら、弥生人の絵画について勉強すると、単なる落書きではないんだろうなということが見えてきました。

まずは、あまり言われませんが、弥生土器に線刻をして任意の絵を描くということは、難しいのではないかと思います。弥生土器は、粘土紐を積み上げて成形し、様々な調整を施して、一定期間乾燥させます。その後、焼きます。絵画を線刻するのは、乾燥させている間だと思ひます。細く深い線を描くには、ある程度乾燥していないと力強く描けませんし、あまり乾燥が進んでいると線刻道具の先が入りにくいと思ひます。ちょうど良いところを見極める必要があります。また、アールのついた土器に線刻するのもやはり難しいことなのだろうということです。多彩な文様を描く弥生人ならば可能かとも思ひますが、少なくとも、絵心がないかつ不器用な私はそう思ひます。

さらに、現代社会には、二次元の絵はたくさん溢れておりますが、弥生時代の社会には、二次元の絵はほぼありません。初めて三次元のモノを二次元で表現しようとするとき、どうなるでしょう？経験したことがないので、その感覚は分かりませんが、非常に難しいし戸惑うと思ひます。また、弥生絵画は、多視点画という点でしばしば子供の絵との類似が指摘されます。実際横を向いているはずなのに、前を向いて顔を正面に見せているように描かれるあれです。これもその影響があるのかもしれませんが、いずれにしても、環境が現代社会とは異なり、今の感覚で上手下手を論じるのは無理がありそうです。

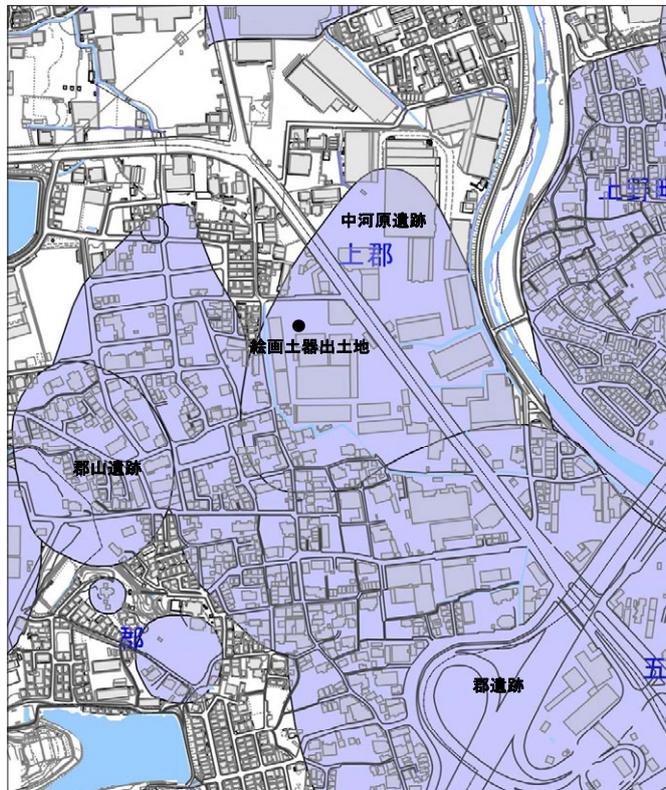


図1 中河原遺跡位置図

また、土器に限らず弥生人の描くものは、特定のモチーフに限定されており、同じような構図の絵が多くあります。

その中でも鹿が圧倒的に多く描かれます。次に、建物や人、鳥などの動物などが多いです。これらのモチーフには、その背景に「稲作」が隠れています。鹿については、弓矢で射られるシカが多く描かれます。なぜこんな情景を描いたのでしょうか。このことについては、参考になるものがあります。後の史料ですが、『播磨国風土記』という奈良時代の史料があります。讃容郡の地名由来を記した箇所がありますが、神様が生きた鹿をとらえて、腹を割いてその血に稲を播くと、一夜のうちに苗になったとの説話があります。また、現在の民俗行事にも参考になるものがあります。長野県南部では、豊作を願う行事として、模造のシカを弓で射て、その腹を子供たちが割いて供物を取るという行事が残っています。このように、鹿と稲作は強い結びつきをもって考えられています。弥生時代の絵画、奈良時代の風土記、現代の民俗行事、これら鹿をめぐる3つの史資料の物語は共通するところが多く、これらの根底にある稲作と鹿の関係が弥生時代にまでさかのぼるのではないかと考えられています。また、鹿の角は春に生え始め、秋には立派な角となることから、稲の成長サイクルと関連付けられたりもします。

次に、鳥も土器や銅鐸に描かれます。鳥も同様に古来より稲作と結びつきが強い動物とされています。人も、鳥の恰好をした人が描かれることが多いです。マツリの際のシャーマンではないかと考えられています。さらに、銅鐸の絵画なども考え合わせると、長い時間幅や地域で共通の絵を描くということは、「稲作」というテーマをもった物語が共通した背景にあるのではないかとされています。

例えば、今でも桃太郎を描いてくださいと言われたときに、私たちは何を描くでしょうか？おじいさんが柴をかる姿？おばあさんが川で洗濯する姿？川から流れる桃？頭に鉢巻を巻いて陣羽織をはおる少年？黍団子？猿？雉？犬？鬼？鳥？ある程度、描く絵が決まっているのではないのでしょうか？弥生人にもそんな伝承

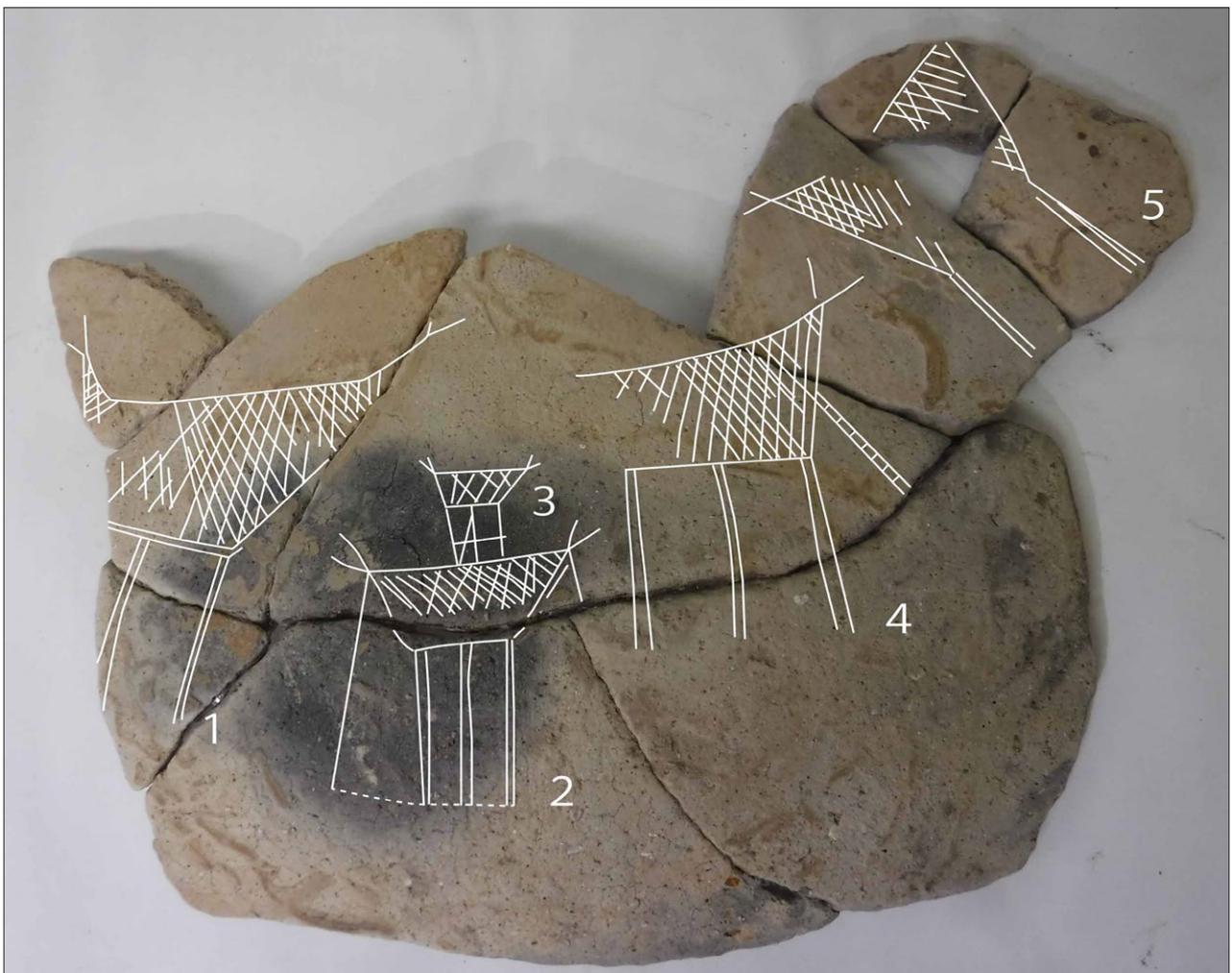


写真1 中河原遺跡出土絵画土器

される稲作の成功を願ったお話があったのかもしれませんが。

このようなことから、弥生人は単に心のままに落書きを描いたというよりは、なんらかのテーマ、恐らく稲作の成功、豊穰といった願いや祈りをもって絵を描かれていたのではないかと考えられています。要するに、単なる落書きではないということです。

さて、なんだかぼやっとしたお話にはじまってしまいましたが、気持ちを切り替えてこの絵画土器が出土した遺跡のことについて、次にお話ししたいと思います。

## 2 中河原遺跡の発掘調査

### ○既往調査

#### ・1979～80年に発見された遺跡

中河原遺跡は、1979年から1980年にかけての発掘調査で発見された遺跡です。

#### ・南に広がる郡遺跡との関係が指摘される

それ以降も、件数は少ないですが、何度か発掘調査をしており、方形周溝墓という弥生時代の墓の溝部分と考えられる遺構や弥生時代中期の土器を確認しております。その中で、中河原遺跡は、南に広がる郡遺跡の分村や郡遺跡の墓域が連続する遺跡だとの評価がなされています。

### ○2016年度から2017年度の発掘調査

今回展示していただいておりますが、2016年度から2017年度にかけての発掘調査では、非常に多くの成果が得られました。全体としては、これまでの調査では、ほぼ墓域の確認にとどまっていたのですが、方形周溝墓などの墓域のほかに竪穴建物や柱穴、土坑など居住域を示す遺構や、調査区を横断するような溝が確認でき、集落の一端が確認できたことが挙げられます。

#### ・土器棺墓と方形周溝墓

既往の調査でも確認していましたが方形周溝墓ですが、今回の発掘調査でも確認できました。中期の中でもやや古い段階の2基と新しい段階の1基を確認しました。この他、周溝墓の溝の一部であろうと考えられる溝もあります。写真パネルに展示されていたものは、やや古い段階の周溝墓2基です。隣り合っておりまして、その向こうに調査区を縦断する溝、長い溝が確認できます。もしかしたら、墓域と集落域を区画している溝かもしれません。この溝の向こうにやや新しい段階の周溝墓が見られます。

周溝墓1から見ていきますと、1の溝には多くの弥生時代中期後半の土器が入っています。溝もしっかり掘削しています。この黒い部分が過去に掘られたことを示しています。2、3は弥生時代中期前半の土器が溝から多く見つかっています。こちらの掘方もしっかりしています。中河原遺跡の人たちは溝をしっかり掘っています。現代の道具で掘るのでも大変苦労したので、弥生時代はもっと時間と労力が必要だったのだと思います。4は、溝の一部です。上部からは割れた土器がたくさんみつき、掘り進めていくと、底からほぼ完全な形の土器などが見つかりました。お墓に供えたものでしょうか。

土器棺についても非常に残りがよく、全体で4基確認することができました。展示していただいております一つは、弥生時代中期の壺を棺に、高坏の坏部を被せて蓋にしております。壺の口と高坏の口のサイズを合わせたかのようにしっかり密着しており、外すのも苦労しました。残念ながら、土器の中から骨などの遺物は確認できませんでしたが、いずれも黒く粘性の高い土が詰まっております。棺内部に流入した土が、中にあった有機質の何かの作用で粘性を帯びて黒くなったのだと思います。土器棺については、まとめて出土する2基以外は、離れたところで確認でき、明確な墓域を構成するとは言えません。

#### ・柱穴と土坑など居住に関わる遺構

柱穴については、検出した遺構の中に古墳時代以降の遺構もございますので、写真に見えている遺構がすべて弥生時代のものではありません。この峻別は、出土遺物等をしっかり整理してやっていきたいと考えておりまして、ただ今整理中でございます。なので、今回この範囲に弥生時代の建物があった、なかったというお話をすることはできません。ただし、少なくとも弥生時代の遺物の入る柱穴や土坑がありますので、当該期の建物や生活が行われていたことは明確に言えるかと思っております。



图2 中河原遺跡 2016-1(A区~D区)、2017-1(a区)平面图

### ・調査区を横断する溝

先ほど、墓域を区画するかもしれない溝が確認されたことを申し上げましたが、この他に、この溝と並行するような溝を確認しております。これらの溝は、40メートル弱の間隔をあけ、等高線に平行に走る溝であることから、いわゆる「環濠」的なものかもしれません。より西側にある溝は、ちょうど土地が一段低くなる場所に走っております。これについても、これから、出土した遺物等を整理していく過程で密に検討してまいりたいと思います。

### ・絵画土器と分銅型土製品

ちょうど、この溝が埋まったのち作られた土坑から、今回のお話のメインテーマである絵画土器が出土しました。この土坑は、半径約175cm、深さ80cm強あります。半分に割ってその堆積を確認しますと、下半分は自然の堆積、上半分は人為的に埋めたような堆積です。これを掘り進めたときに絵画土器が出土しました。といっても、その場では気づいていませんでした。そして、その周辺から分銅型土製品も出ました。分銅型土製品は、瀬戸内地域を中心に出土する遺物で、その用途等ははっきりしませんが、穴が開いていたり、ちょっと笑ったような人の顔が描かれているものがあったりします。大変特異な遺物です。



写真2 絵画土器出土状況

## 3 建物絵画土器ともう一つの絵画土器

いよいよ本題の絵画土器について、お話していきます。

### ○5棟の高床建物が線刻されている

先ほど、弥生人が描く絵のモチーフとして建物が多いというお話をしました。ただし、見つかっている建物の絵は破片の物が多く、建物の一部から全体を推測するものが多いです。今回見つかった絵画土器は、建物の大部分が確認でき、しかも一つに5棟も描かれているということが極めて希少であり重要です。その5棟は、基本構造を共通させながらも、細かな点で差異をもっています。以下、その点を確認していきます。

#### ☆共通点

##### ・3本の長い柱(二本の直線)

まず、一つ目には3本の長い柱が挙げられます。いずれも二重線で表現されております。これは、屋根に比して長く描かれ、高床建物であることを示していると推測されます。

##### ・斜格子で充填された逆台形の屋根

次に、屋根です。いずれも上辺が下辺より長く描かれ逆台形の形をしております。棟が大きくせり出すような切妻造りの建物であると考えられます。そして、いずれも斜格子によって屋根部分が充填されています。

##### ・棟の両端に「千木」状の飾り(cf. 弧線や渦巻き状の棟飾り、古墳時代の棟飾り)

次にせり出した棟の先にV字状の飾りが付けられます。表現としては、屋根の線とは切り離してV字を描いております。これは、古墳時代の家屋紋鏡や家形埴輪や後の神社建築等に見られる「千木」に相当するものの可能性があります。これは、奈良県の唐古・鍵遺跡などで出土している渦巻きや弧線の棟飾りとは明らかに違う表現であります。この違いは何に起因するのか等大変興味深いところではありますが、今の私にそれを解明する力はありません。ちなみに、唐古・鍵遺跡でもV字状の棟飾りを持つ建物絵画が一点出土しております。こちらの場合は、屋根の線を伸ばして棟の飾りを表現されており、中河原遺跡のものとは、やや表現が異なります。家屋紋鏡を見ると、中河原遺跡の表現の方がより家屋紋鏡の表現に近い気はします。

#### ☆相違点

##### ・梯子(建物4)2本の直線の間刺突、屋根の中ほどにかかる

次に梯子です。二重の直線の間列点を施しております。建物4の妻側にかかけられます。切妻建物の絵画につく梯子は、向かって右の妻側に取りつくものばかりです。この梯子があるからこそ、この建物が高床建

物だと明確に言えるのです。また、梯子の取りつくところに床があると想定されますが、この絵画では屋根の中ほどにかかっております。この表現が実態をとらえているならば、屋根倉形式の建物であったと思われます。

#### ・棟持柱 (建物2)

建物2の向かって左側には棟持柱が確認できます。磨滅により確認できないだけで、恐らく右側にもついていたと思われます。大きくせり出した棟を建物の左右で支える柱です。大阪府和泉市にあります、池上曽根遺跡で復元されている大型建物にもみられるものです。

#### ・大小 (建物3)

建物3は、ほぼ同様の基本構造を持ちながらも一つだけ小さく描かれます。建物2と合わせて重層建築を想定する向きもあるみたいですが、実際の構造上難しいと考えられることと、この絵画では構造上つながっている部分、例えば屋根と柱などは線がくっつくもしくは重複して表現されていますが、よく見ると建物2の屋根と建物3の柱にはいくらかの隙間が見られます。また、「遠近法」を考える向きもあろうかと思いますが、私にはよくわかりません。弥生時代には小さく表すことによって遠近を示すことはないと考えられています。

### ○もう一つの絵画土器

#### ・共伴していた壺にも意匠不明の線刻がある

実はもう一つ絵画が描かれた土器が出土しています。これについては、報道でも取り上げられていませんし、茨木市文化財資料館の速報展では展示しましたが、あまり知られておりません。

描かれている線刻については、磨滅している部分が多く、その意匠は難解ですが、2本のほぼ並行する横線の間を斜格子で充填し、一部その下に斜線で三角形をつくる箇所が2カ所認められます。建物等の可能性を考えますが、違いかもかもしれません。

さらに、実は、この土器は建物の絵画土器と一緒に出土しています。

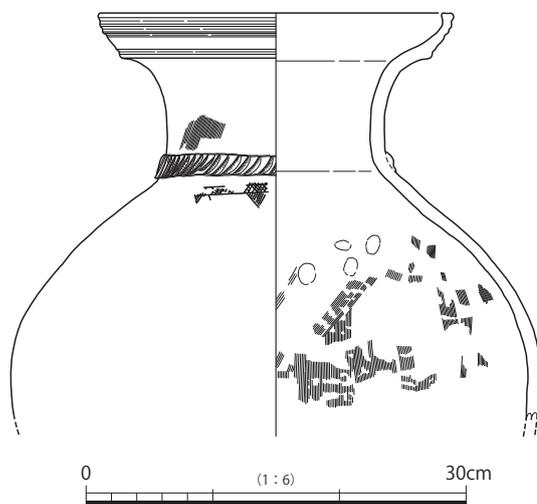


図2 もう一つの絵画土器実測図

発見当初は、建物の絵画土器と同一個体ではないかと試行錯誤しましたが、綿密に見た結果、どうやら別個体ようです。意匠不明ではありますが、同じ土坑に同じ時期に「廃棄」されたと考えられる複数個体の絵画土器が認められたことは、重要であると思います。発見自体が希少な絵画土器ですが、これによって同時期に複数個使用されていた「マツリ」が想定できると思います。

## 4 絵画土器における「写真」資料の有用性

次に、視点を変えまして、ちょっと玄人っぽいこととお話します。これは、改めて私が言うことでもないとも思いますが、私自身が想い改めたといいますか、大変感動したところもありますので、ぜひお話しておきたいと思います。

私も歴史を考える人は、その史資料をととても大事にします。それは、できる限り当時のもの、実物といえますか本物といえますか、そういう資料が歴史を考えるためには一番有効であると考えます。考古学で言ったら、土器そのものや遺構そのものですね。歴史学で言ったら、文書そのものです。それを記録する段階では、悪い意味ではありませんが、主観が入ったり、情報がそぎ落とされたりします。「資料操作」です。それは必要なことです。ですが、研究をする場合、それにより落とされた部分に歴史の真実が眠っているのではないかと、やはり本物にあたります。研究をするには、本物が絶対だと思っていました。そういうものだと考えていました。

しかし、今回、絵画土器を観察するにあたって少し考えを改めました。以下、実際に資料を見てみましょう。

## ○デジタル高精細写真(奈良文化財研究所中村一郎氏撮影)

これは、深澤芳樹さんにお世話になりまして、奈良文化財研究所の中村一郎さんに撮っていただいた写真です。文化財写真の第一人者に撮っていただきましたので、非常に素晴らしい写真だと思います。ですが、ただ写真が素晴らしいだけではありません。これは、デジタルですので、パソコン上で自在にアップして見ることができるのです。

実は、報道提供した写真は、私が急ぎ見える線をなぞったもので、とうてい完全なものではありません。これについては、茨木市文化財資料館の館報の第4号であらためて公表する予定ですが、その前にここでだけ特別にお話しておきます。

### 絵画土器をアップで見ると

#### ・肉眼で見えない線刻が見える(建物1の柱を結ぶ直線)

実は、この精細な写真を拡大すると、建物1の柱と柱の間に浅いながら横線が確認できます。これは、現在展示されている本物を見てもなかなか確認できません。

#### ・線の深淺が明瞭に見える(建物屋根の斜格子)

また、建物2の屋根の部分をご覧ください。ここを拡大して見てみると、浅い線と深い線がはっきり見えます。これは、肉眼で頑張れば見えるかもしれませんが、写真を拡大すると一目瞭然です。ちなみに先に右から左下への斜線を描いて、その後左上から右下の斜線を引いていることが分かります。右利きでしょうか。

#### ・線刻の中が見える(建物4の棟飾り)

次に建物4の右側の棟飾りを見てみましょう。拡大しますと、線の内部が見えてきます。そこには、線の内部に小さな山ができていのが分かります。これは、線刻する道具の先が線刻をするにつれ割れてきていることに起因しているのではないかと思います。ということは、そのような素材で線を刻んでいるのです。木でしょうか。

このように、高精細のデジタル写真によって、観察することにより本物の観察では難しいところも容易にできるのです。



写真3 中河原遺跡出土絵画土器(奈文研撮影)



写真4 建物1柱部分拡大

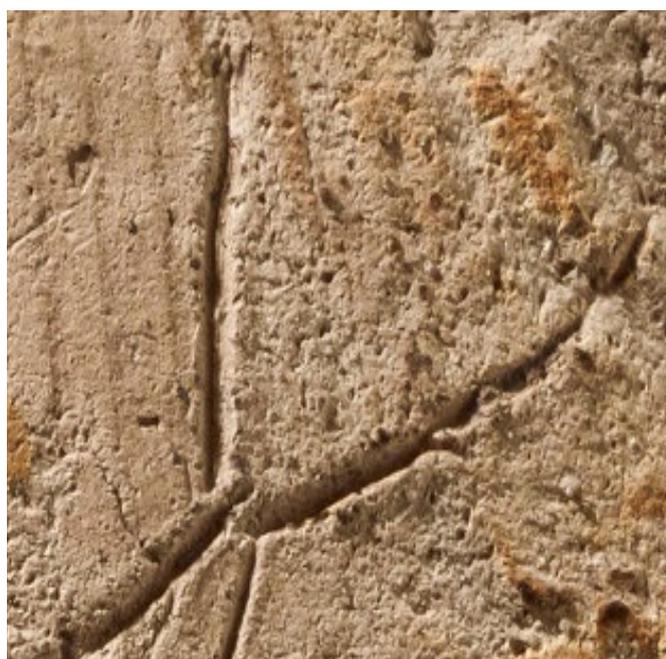


写真5 建物4棟先拡大

## ○「発見」後すぐに撮った写真（報告者が携帯電話で撮った写真）

次に、この土器に絵が描かれていると知って、あわてて携帯電話で撮った写真をあげます。最近の携帯電話のカメラは進化しておりまして、何の調整もせず起動してボタンをタッチすればいい感じに撮ってくれます。

### ・建物2の棟持柱の線刻と下端の線刻が薄く見える

この写真には、高精細のデジタル写真では見えない線が見えます。たとえば、非常にうっすらですが建物2の棟持柱と3本の柱をつなぐ線です。これは、報道提供の時にはうっすら見えるのではないかと破線で表現しております。

### ・建物3の屋根部分がよりはっきり見える

また、建物3の屋根もはっきりあることが確認できます。当然、写真の精度としては、奈良文化財研究所の中村さんに撮っていただいた写真の方が断然高いです。しかしながら、私が撮った写真に見えて、中村さんが撮った写真には見えない線があるということも事実です。これは、撮ったタイミングに起因すると思われます。私が撮ってから、中村さんが撮るまでには数か月の時間差があり、その間に「整理」作業や報道提供、茨木市立文化財資料館や大阪府立弥生文化博物館で展示をする機会がありました。当然のことですが、大変希少なもので、これだけ注目されておりますので、私を含めて誰しものが粗雑に扱ったりしておらず、慎重の上に慎重を重ねた上で取り扱ってまいりました。ですが、「整理」や公開の過程で線刻が徐々に失われてしまったのです。これは、ひとえに担当者である私の責任でもありますが、一方で文化財の「整理」や公開は文化財の一定程度の損壊と引き換えであることをも示していると思います。



写真6 発見時写真（報告者撮影）

## ○出土状況の写真（現場での写真）

気を取り直して、次に出土したときの写真を見てみましょう。この写真を拡大すると、建物2の下部が描かれている土器片が確認できます。ちょうど逆さになっています。

### ・建物2の棟持柱の線刻と下端の線刻がはっきりと見える

その写真をよく見ると、はっきりと建物下端に線が描かれていることが確認できます。さらに、棟持柱の線もはっきり見えます。現物において確認できない線なのではなはだ躊躇しますが、出土時の写真と「発見」時の写真、二つの写真で同位置にこの線が見えますので、恐らくこの線刻があったのでしょう。



写真7 出土状況拡大

### ・建物以外のモチーフがあるカ シカなど

また、その目でこの写真を見ると、端の方に楕円が見えます。その中が斜格子で充填されているようにも見えます。もしかしたら、建物以外のモチーフもあったのかもしれませんが。

以上、三つの写真資料を見ながら検討をしました。いずれの写真にも現在展示してもらっています現物を肉眼で見る以上の情報が含まれます。絵画土器の研究において、写真資料は非常に有効だと感じるとともに、より早い段階でより精細なデジタル写真を撮る必要があると再認識いたしました。

ただし、誤解していただきたいことは、本物の重要性は1mmたりとも揺るがないということと、弥生時代の絵画土器の研究に写真資料が大変有効だったということです。

## まとめ

まとめに入ります。今回お話したことをまとめますと、まず中河原遺跡で出土した絵画土器のことです。この絵画土器の重要性をまとめることで、お話のまとめとしたいと思います。

### ○中河原遺跡出土絵画土器の重要性

#### ・ 共伴の土器から概ね時期が想定できる

この絵画土器は、その出土状況と共伴する土器から概ね弥生時代の中期後半の土器であることが分かります。この時代は、絵画土器が多く残されている時代です。

#### ・ 複数の絵画土器が共伴している

また、先にも触れましたが、複数の絵画土器が一緒に出ていることから、複数の絵画土器を同時に使用していたのではないかと推測できます。

#### ・ 5棟の大部分の線刻を確認できる→推測で補う部分が少ない

そして、この資料の価値を大きく高めるのは、こと土器片に線刻が多く残っているということです。5棟の大部分を確認できるということは、推測で補う部分が少なく、前提がしっかりしているといえます。

#### ・ 同構造の「高床建物群」、豊穰のマツリとその風景をうかがう資料

絵画の内容ですが、これは単なる風景画ではないということは冒頭の話の中でお分かりいただけたと思います。恐らく稲作の成功を願う、豊穰への祈りや願いがあり、かつなんらかの物語が背景にあるのだろうと。ただ、その心象風景を実際の経験の中で描くときに、目の前に広がる風景に影響されることは大いにあることだと思います。目の前にこんな風景があったのかもしれませんが。中河原遺跡の発掘調査では、そのような遺構は今のところ確認できていませんが、もしかしたら今後発見されるかもしれません。しっかり調査していきたいと考えております。

### ○写真資料の有用性

#### ・ 高精細デジタル写真資料は土器の線刻の観察には非常に有効

非常に細かな浅い線刻がある絵画土器の観察は、肉眼では難しい部分があります。その時に、高精細のデジタル写真がありますと、パソコン上で自在に拡大ができますので、本物を観察する以上に線刻が見えます。この点で、高精細デジタル写真の史的価値は本物以上となります。

#### ・ 文化財の「整理」→目立った損傷はないが、少しずつ「損壊」している

また、写真資料の中でも、より発見に近い段階で撮影したものの方が、情報が多いことがあります。これは、「整理」「公開」ですこしずつ、目に見えないながらも文化財が「損壊」していることによります。言い換えれば、「損壊」と引き換えに、モノが持つ情報を引き出したり、皆さんにお見せしたりしているのです。ただし、やむを得ない部分が多いとはいえ、私たち担当者には少しでもその「損壊」を少なくする努力が必要であることは、言うまでもありません。

#### ・ 適切・迅速な補修の必要性とともに、記録を残すことの重要性

このようなことから、技術に大変感動したとともに、より迅速に、より精細な記録を残すことが大変重要だということを、この中河原遺跡で出土した絵画土器の検討から再認識いたしました。

### [参考文献]

茨木市教育委員会 1992 「中河原遺跡の発掘調査」『平成3年度発掘調査概報』

茨木市教育委員会 2002 「中河原遺跡」『平成13年度発掘調査概報』

茨木市教育委員会 2010 「中河原遺跡」『平成20年度発掘調査概報』

茨木市史編さん委員会 2014 『新修茨木市史』第七巻 史料編 考古

大阪府立弥生文化博物館 2006 『弥生画帖』大阪府立弥生文化博物館図録 33

大阪府立弥生文化博物館 2009 『弥生建築—卑弥呼のすまい—』大阪府立弥生文化博物館図録 41

大阪府立弥生文化博物館 2018 『弥生のマツリを探る』大阪府立弥生文化博物館図録 64

沖森卓也・佐藤信・矢島泉 2005 『出雲国風土記』

香芝市二上山博物館 1996 『弥生人の鳥獣戯画』

国立歴史民俗博物館 1997 『銅鐸の絵を読み解く』 歴博フォーラム

佐原真 1980 「弥生時代の絵画」 『考古学雑誌』 第66巻1号

佐原真・春成秀爾 1997 『原始絵画』 歴史発掘 (5)

佐原真 2005 『美術の考古学』 佐原真の仕事 3

滋賀県立安土城考古博物館 1994 『春季特別展 弥生の祈り人』 —よみがえる農耕祭祀—

高村勇士 2018 「茨木市中河原遺跡の調査—中期の集落—」 近畿弥生の会第21回滋賀場所資料集

辰巳和弘 1990 『高殿の古代学—豪族居館と王権祭儀』

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2017 『新作発見！ 弥生絵画』 一人・動物・風景—特別展図録第87冊